対談 子どもの寄付とマネー教育

日本フィランソロピー協会理事長　高橋陽子氏　X　岡本和久

子どもにマネー教育が必要ということはよく言われるところです。でも、マネー教育とひと口に言っても、実は、「使い方」「貯め方」「増やし方」などいろいろな側面があります。そのなかでも大切なのは、「寄付」ということではないかと思います。
寄付によって、子どもたちがどのようにおカネや社会のことを学ぶことができるか、日本フランソロピー協会理事長の高橋陽子さんに子どもが行う「マネーハーベスト・プロジェクト」について伺いました。

タイガーマスク現象は民主主義の萌芽

岡本　インベストライフの2月号で高橋さんにタイガーマスク現象のお話を伺いました。そのなかで、タイガーマスク現象を「民主主義の萌芽（ほうが）」とおっしゃっていた。それが非常に印象に残っています。どうも、われわれ、困った人を見ると「政府は何をしているのか」と思いがちですが、タイガーマスク現象は、もう、政府には頼れない。困った人がいたら自分のできる範囲で助けようということなのかもしれません。そういう意味では本当に民主主義が萌芽してきたといえると思います。

高橋　そうだと思います。

岡本　やや自嘲的に「日本は最も成功した社会主義国家だ」などという話を聞きますが、意識していようがいまいが、個人も企業も何かあると、公的部門頼りになる傾向があった。その結果、公的部門の体力が極端に弱くなり、どの政党が政権をとろうと肝心の体力がないから何もできないことが明確になってきた。そこで、もう、政府頼りではラチがあかない、自分たちで生き延びようという気持ちがみんなに出てきているように思います。私自身、昨年末から何となく日本に明るい雰囲気を感じるのはそんなところに原因があるのかもしれません。

高橋　みんな、肌で感じるようになっているのでしょう。「このままではまずい」という「種の保存本能」かもしれません。タイガーマスク現象もそうですが、やはり、メディアの影響が大きいので、皮肉ったり揶揄（やゆ）したりする報道はしないでもらいたいですね。

岡本　ここのところちょっと話題になっていませんが、このような現象を一過性のものとしてとらえて欲しくないですね。むしろ、この運動を育てるという意識を持ってもらいたい。日ごろ、おカネに関する暗い、汚い出来事がたくさん報道されているので、おカネのイメージがどんどん悪くなってしまうのが心配です。ですから、このような善意の裏づけのあるおカネの使い方というのは盛り立てたいし、マスコミにもがんばってもらいたい。

高橋　おカネに最初から色をつけるのはおかしいですからね。

岡本　新聞なんかでも、ひとつ、ネガティブなニュースを掲載したら、ひとつはポジティブなニュースを探すなどの配慮が欲しいと思いますね。

高橋　ほんと、そうですよ。すごく大切ですよね。結局、メディアの人もコメンテーターの人もあまり寄付をしていないのではないでしょうか？　あるいは、していても口にしないのか・・・。

インベストライフ2011年3月号　Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

岡本　昨年12月1日の日経新聞に小さな記事が出ていたんです。岡山県の85歳の女性が「クマの餌を買うおカネに使って」というので13万円を寄付したというんですね。市はドングリがなるブナ科の苗木200本を発注して、職員が手分けして植樹したそうです。「自治体の責任をクマに押し付けないで」ということで寄付をした。本当は宝くじを買うおカネだったそうです（笑）。これなんか、ちょっといい話でしょう。こういう記事をもっと載せて欲しい。

高橋　いい話ですね。もっとこういう話がみんなに知られるといいですね。

岡本　寄付は決してお金持ちの専売特許じゃない。日本フィランソロピー協会の「まちかどのフィランソロピスト賞」にしても、受賞者はみんな一般の人ですよね。最近は学生も結構、受賞していますよね。

高橋　そうです。ごく自然体で寄付や社会貢献をしています。特に子どもたちは楽しんでいるようです。日本では寄付文化があまりないといいます。確かにそうなんですが、では、希望が持てないかというとそんなことはありません。よく考えてみると、日本には昔から「おひねり」というのがあるでしょう。

岡本　ああ、舞台が終わったとき、役者にご祝儀としてあげた投げ銭ですね。おカネをそのまま投げるのではなく、紙に包んでひとひねりして投げたので「おひねり」。

高橋　これがもう少し広がるといいと思います。

岡本　なるほど。確かにおひねりの良い点は中にいくら入っているかわからない。いくら金額が少なくても恥ずかしいなどと思う必要がなく、気持ちだけでいい。そして、それを全部集めてしまえば、どれが誰の分かもわからなくなる。だから気楽にできるし、自分もちょっと気分がいい。

高橋　そうですね。できる範囲で気楽に自分の「他利」の気持ちを表現すればいいんですよ。

岡本　やはり、教育ということがベースになると思うのですが、日本フィランソロピー協会で開始される「ペニーハーベスト・プロジェクト」についてお話いただけますか？

「ペニーハーベスト・プログラム」とは

高橋　はい。ひと言で言えば、子どもが行う募金活動です。アメリカでコモン・センツというNPO法人が1991年から始めた活動です。「ペニー」というのはアメリカのコインで最小単位の1セント玉です。日本円で今なら0.8円。「ハーベスト」は収穫。4歳から14歳の子どもたちが小銭を集めてきて募金活動を行うことで社会のことや、おカネの大切さを学ぼうという教育プログラムなんです。すでに926の学校が参加して、770万ドル以上が集まる大きなムーブメントになっています。

岡本　770万ドルといえば6億円以上。子どもたちがそれだけ集めるとはすごいですね。

高橋　アメリカの学校は、学期が9月から始まり5月に終わるので、その期間が活動のサイクルということになります。その間に作物を収穫するように、募金を集め寄付をします。

子どもたちの代表が話し合い、社会の抱える課題に取り組んでいる役所やNPOを選び、そこに寄付をする。子どもたちはその過程で、寛容性や道徳心、公共心を身につけるし、募金集めの経験を通して、社会の仕組みを理解し、リーダーシップ、コミュニケーション力、チームワークなどを身につけるようになるわけです。これは、サービスラーニングといって社会貢献を教材にして、知的学習のなかに取り入れて学ぶ、というものです。また、地域との連携が強化されるというメリットもあります。

 Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

岡本　自分たちで考えて行動するという点が重要ですね。そして、善意の目的で使うということから入れば自然におカネのイメージもよくなるでしょうね。何といっても「他利」になることをすると自分がうれしい、気持ちいいということを実感できる。もう少し、活動内容を教えてください。

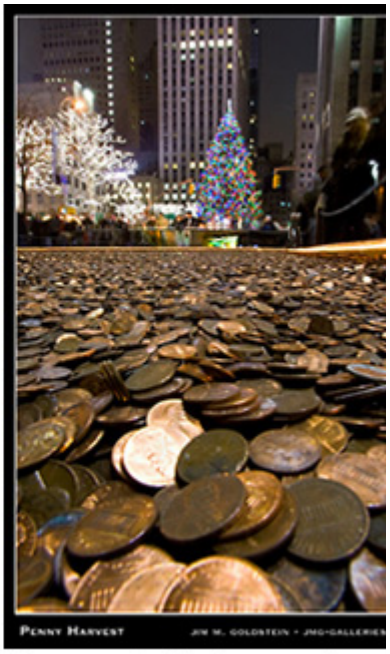
高橋　4段階の活動があります。まず、第1段階は、学校などでグループを作って、子どもたちが地域の抱える課題を調査します。行政やNPOを訪問して、その活動内容を学び、自分たちでどこに募金を寄付するか、議論して決めます。

目的が決まったら、第2段階に入ります。子どもたちが近所を回って小銭を集める募金活動をするんですね。募金活動が終わった第3段階では、もう一度NPOを調べ直し、どこにいくら寄付するかを決め、寄付を手渡します。同時にボランティアプログラムなども並行して企画し、実行します。そして、最後の第4段階では、子どもたちがパーティなどのイベントを企画し、開催します。ざっとこんな感じです。

岡本　あくまで子どもたちが自分の頭で考えて、自分たちで調査し、行動するという点が素晴らしいですね。

高橋　ちょっとこの写真を見てください。ニューヨークのマンハッタン、そのミッドタウンの真ん中の五番街にロックフェラーセンターがありますよね。2007年12月にロックフェラーセンター前の広場にトラック数十台分の大量の1セント玉が集められたのです。全部、子どもたちが集めたおカネです。

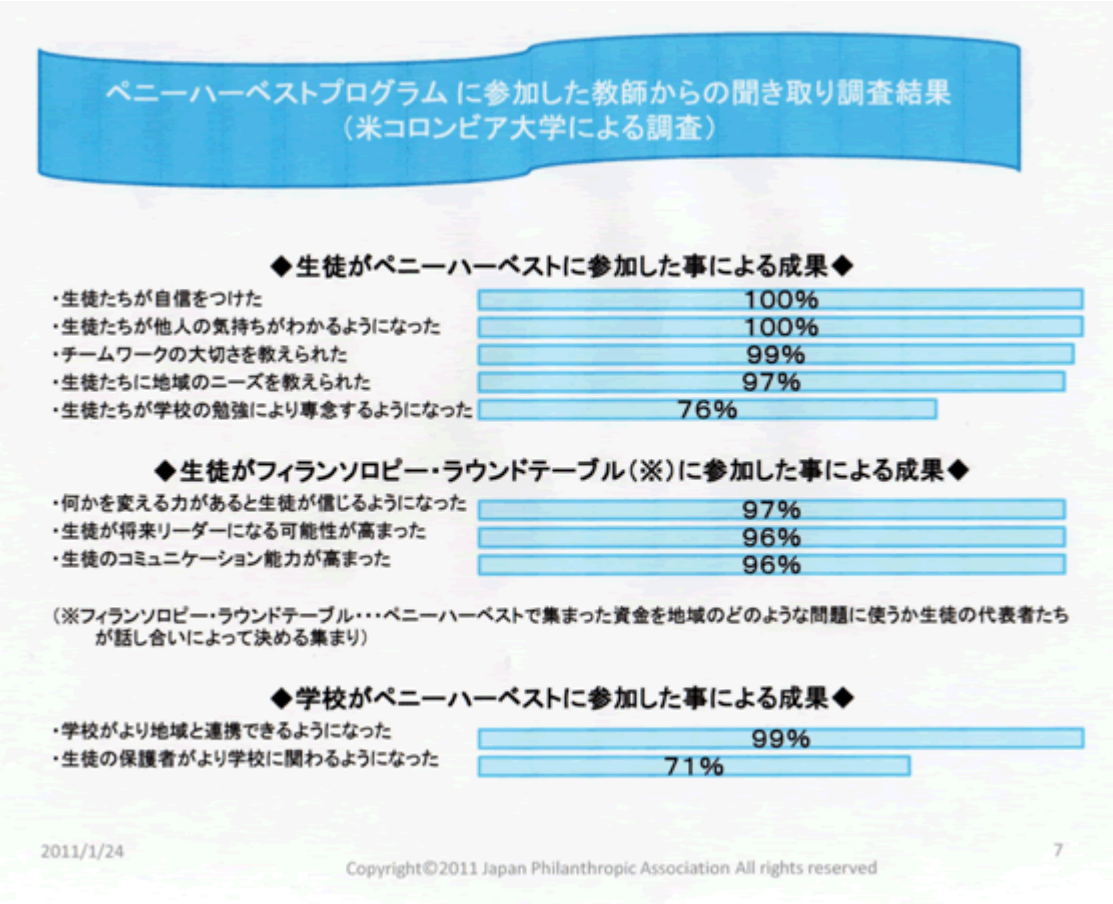
岡本　私も通算11年、ニューヨークに住んでロックフェラーセンターはなじみの場所ですが、12月というと時節柄、そこはエンジェルの装飾がきれいなところです。あそこがペニーで埋め尽くされたと思うと感動しますね。ペニーは銅貨ですが、この写真では光り輝いて見えます。



（http://www.jmg-galleries.com/blog/2007/12/26/christmas-time-in-new-york-city-the-penny-harves

高橋　盗難を防止するためにセキュリティが寝ずの番で大変だったそうです。コロンビア大学が、ペニーハーベストプログラムに参加した教師を聞き取り調査し、結果をまとめています。「生徒たちが自信をつけた」「生徒たちが他人の気持ちがわかるようになった」など、とてもよい結果が得られています。

インベストライフ2011年3月号　Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社



（日本フィランソロピー協会資料より）

岡本　これを今度、日本でなさろうとしているわけですね。

高橋　そうです。日本で行う目的は大きく三つあります。まず、第1が日本に寄付文化を醸成すること。行政に依存するのでは限界があります。民間が公益活動を担うという文化を作っていきたいのです。

岡本　個人が税金を納めて、それを政府が福祉目的で配分するのではない、個人が自分の判断で自分の意思を持って寄付先を決める。ちょうど、個人が銀行におカネを預けて銀行が融資先を決めるのと、自分で投資先を選んで株式や債券を買うのと同じですね。金融では前者を間接金融、後者を直接金融といいますが、寄付も間接寄付ではなく、直接寄付になればいいですよね。子どもたちが直接寄付の楽しさを感じてくれれば寄付文化も醸成されるでしょうし、子どもから大人が変わっていくということもあるでしょう。

高橋　第2が子どもの人間としての成長を促進したいこと。これには自己肯定感の醸成とリーダーシップ力の向上のふたつがあります。

まず、自己肯定感の醸成ですが、これは、自分がかけがえのない存在であること、思いやりのある道徳心を持った人間になること、そして、社会の一員としての責任を持つことの三つを理解させることが目的です。リーダーシップ力の向上については、他者に働きかけることを通じて、自らの役割を認識すること、チームワーク力、表現力、コミュニケーション力、達成力を身につけてもらいたいと思います。

岡本　なるほど。

高橋　そして大きな目的の三つ目が学校と地域の連携促進です。

岡本　結局、寄付という活動を入口として、社会の仕組みや自分の生き方、おカネのことなど幅広く学んでいこうということですね。このような経験を子どものころにできたら本当に素晴らしいと思いますよ。一生の誇りにもなるし、宝にもなる。そして、より良い生き方を考えられるようになる。

高橋　自分の心のなかにある「他利」の気持ちとおカネを、行動を通じて結び付けていくことが大切です。

日本で寄付文化を定着させるために

岡本　私も常々、投資教育の前にマネー教育が必要だといっていますが、「寄付」という行動を通じておカネとの正しい付き合い方を学ぶというのはとても素晴らしい。

実は、昨年、アメリカでちょっとおもしろい貯金箱を見つけたんです。かわいい子豚の貯金箱で、アメリカではピギーバンクと呼ばれています。私の新著、『賢い芸人が焼き肉屋を始める理由＊投資嫌いのための「和風」資産形成入門』（83ページ）でも紹介したのですが、おもしろいことにこの貯金箱はおカネを入れる口が四つあります。

高橋　（本の写真を見て）わー、かわいい！

岡本　かわいいでしょう。それで四つの口というのが、SAVE（貯める）、SPEND（使う）、DONATE（寄付する）、INVEST（投資する）に分かれていて、おカネがそれぞれの足から取り出せるようになっています。よく考えると、これは、「貯金」箱ではなくて、おカネの「使い方」箱ですよね。4歳から11歳の子ども向けだそうです。

高橋　いいですね、これ！　DONATEのところがお腹の一番太いところになっているのがうれしいですね（笑）。

岡本　さすが鋭い着眼ですね！　それ以来、私のセミナーなどでも、参加者に「SAVEとINVESTはどう違うかわかりますか？」って聞くんです。そうすると意外にみんなわからない。「これ、アメリカでは4歳から11歳の子が勉強することなんだよ」って言うんですが、みんな苦笑いしています（笑）。

高橋　改めて聞かれると「？」って思う人も多いでしょうね。

岡本　このピギーバンクのおカネの入れ口にスティッカーを貼れるんです。たとえば、SPENDのところにはハンバーガー、SAVEには自転車、DONATEにはギフトボックス、そして、INVESTには学帽です。これを見るとよくわかります。SPENDは今の自分の欲求を満たすことを目的として使うおカネです。SAVEは自転車のように1カ月のお小遣いでは買えないものを買うために貯めておくおカネ、取っておくおカネですよね。DONATEは人を喜ばせるおカネ、そして、INVESTは将来の自分を支えるためのおカネということになります。

高橋　素晴らしい・・・・・・・。

インベストライフ2011年3月号　Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

岡本　INVESTについていえば、将来の自分を支えるためには、単に引き出しに入れておくだけでは不十分です。やはり、増やさなければならない。これがSAVEとの違いですね。SAVEはただ貯めておくだけ。INVESTは増やす。それではどうしたら増えるかというと、今、おカネを必要な人に用立ててあげる。その人はそのおカネを活用して収益を得る。そして、感謝の意を込めて収益の一部をお返し（リターン）してくれる。こうしておカネが増えるわけですよね。

さらに、おカネを用立てるときには、おカネを貸すという選択肢と、おカネを投ずる、つまり、事業にオーナーとして参加するという選択肢があります。こんな切り口で話を広げていくと、投資のことでも全然違った印象の説明になるんですね。投資というとすぐ、「売ったり買ったりで、儲けたり、損したり」って思う人が多い。このピギーバンクは本当に出合ってよかったと思います。いつか、インベストライフ・バージョンを作りたいと思っています。

高橋　ぜひ、ぜひ。

岡本　要するに大切なのはお小遣いをどう使うかということなんですよね。日本の招き猫の貯金箱だと背中におカネの入れ口がひとつある。そして、使うときは貯金箱を割らないといけない。つまり、「できるだけ使わないで取っておきなさい」というメッセージが込められているような感じです。

一方、こちらは、「おカネの使い方を考えなさい」と言っている。日本の個人がひたすら銀行におカネを預けているのも、猫の貯金箱におカネをチャリン、チャリンと入れているのと同じイメージです。もっと、おカネを活用すれば、増やせるし、おカネを用立ててもらった人がビジネスを積極的に展開できるかもしれない。まあ、アメリカの貯金箱がすべてこのような形式ということではなく、これはあくまでマネー教育用の教材だと思いますが。

高橋　毎日、これを見ていると自然におカネを大切に使う習慣が身につくでしょうね。

岡本　反対に日本の貯金箱を毎日見ていると、ひたすらおカネを使わない習慣が身につく（笑）。もうひとつ言えるのは、学帽のスティッカーで表される学資ですよね。これも、将来の学資は自分で準備しなければいけないということが刷り込まれていく（笑）。まあ、自立のトレーニングですね。ペニーハーベストに話を戻すと、今後はどのような展開になりますか？

高橋　5月末にアメリカからコモン・センツのテディ・グロス氏を招いてお披露目のシンポジウムをします。東京と関西で予定しています。3年ぐらいはがんばり続けなければいけないと思っています。

岡本　シンポジウムもこのプロジェクトも大成功されることを祈っています。また、ご協力できることは喜んでさせていただきます。

今日は寄付という視点からおカネのことをお伺いしましたが、とても興味深く参考になりました。お忙しいところ、大変ありがとうございました。

「寄付文化を日本に根付かせよう」シンポジウム（仮題）

日本に寄付の文化を根付かせるために、寄付の文化が根付いているアメリカより
テディ・グロス氏を招いてのシンポジウムを開催。
・東京　5月28日（土）
・奈良　5月末日
※詳細は日本フィランソロピー協会ホームページ（http://www.philanthropy.or.jp/）を参照ください。

 Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社